

佳作

## テーマ1..医療と福祉、わたしの体験 「病気が導いてくれたもの」

福岡県・北九州市立高等学校2年 藤崎詩麻

私はついていない。小学五年生、転倒で手指を骨折。その手術前の血液検査で一型糖尿病が発覚した。小学六年生、右足首が大きく腫れていることに気付き、整形外科へ受診すると仮骨形成と診断される。痛みは仕方のないものと言いつつも聞かされ長年痛みと付き合うことになるが、高校二年生になってから、誤診断だと判明した。血管腫という一種の病気であった。腫瘍を取り出すための手術が一カ月後に控えている。足首に大きな傷が残る。一生消えない、傷が残る。

私はとことんついていない。病気の先生から激しい運動を制限され、習い事で6年間続けたダンスもできなくなった。外で走り回って遊んでいる友人たちを見る度、ついこの間まで一緒にステージに立っていた仲間が遠い場所で見ているのを見る度、強く胸が締め付けられた。なんであの子とは違うの。なんで私は私なの。そう考える度、自分と自分の体が嫌になった。何もできない空っぽの体で、空っぽの毎日を過ごしていた。

一型糖尿病とは、生活習慣病である二型糖尿病とは異なり、主に自己免疫によって起こる病気だ。毎朝、毎食前、自分で体に注射をして薬を注入する。体に針を刺すと同時に、心の傷にチクリと響く。血管腫とは、原因不明の病であり、血管が変化し異常な塊を作ってしまう病気だ。患部が大きく腫れ上がり、ジャンプや衝突などで刺激を受けるとしばらくの間スキズキと痛む。

これらの病気を抱え周りでできることが減った私だが、それにより出会えたものもある。まずは音楽だ。中学生になってダンス部に入ること諦め、友人に誘われて吹奏楽部に入部した。今まで体を使って表現していた私にとって、音だけで表現することはとても新鮮だった。

その難しさが私の熱を上げ、高校生になった今でも吹奏楽を続けている。音楽は、体が弱い私を未知の世界へと連れて行ってくれる。まるで病気が治ったかのように心と体が軽くなり、どこまでもどこまでも、連れて行ってくれる。

また、たくさんの病院、先生にお世話になる中でできた夢がある。医療機器開発技術者だ。医療機器の研究開発、設計を行う仕事である。私も最先端の医療技術を使って形にしたい。私が医療機器に救われたように、たくさんの患者さんの負担を減らしたい。

その他にも、主治医の先生を始め、病院で出会えたたくさんの先生、友人がいる。辛いのは私だけじゃないと思わせてくれた大切な人。これからも一緒に闘病していきたい。辛くなったら支え合い、励まし合い、一緒に病気に打ち勝ちたい。

このように、病気にならないと出会えなかったものがたくさんある。私は決断についていけないわけではなかった。病気を上回るほどの素晴らしいものを神様が与えてくれた。病気になって良かったと言えは嘘になってしまうが、少しだけ感謝している。絶望におそわれていた私を救ってくれた希望の光があるから。そして今でも輝き続けてくれているから。いつか私も誰かの希望になりたい。私が私で良かったと思わせてくれたように。